

エピソード1 校内放送

花山小学校では、数年前から放送委員会で、来日したばかりの子どもたちにも給食放送や朝の放送をさせるようになったんです。昔は日本の子がやってたんだけど、最近は来たばかりの子が放送をやるんですよ。

そうしたら、放送室の後ろで、みんなで練習するようになるんです。「こう言えばいいよ」と教えながら。放送って目立つ場面ですからね。来たばかりの子が何回かやるうちに、うまくなっていくのがすごく見える。そうすると周りから「上手になったね」「よかったよ」という言葉が、子どもたちからも、教員からも出るようになる。そういう中で、外国から来た子どもも自信がつくようになってくるようです。

だんだんそれが「当たり前」になってくると、特別、頑張ったねって拍手するわけでもなく、日本語が上手とか下手とか関係なく、放送委員は誰でもやって当然よって感じになっています。

ちょっと前だったら、うまく言えないのを冷やかしたり、ばかにしたりする子がいたんですよ。そしたら当然、本人も傷つく。今とは全く違いますね。



このエピソードには実際のインタビュー時の会話と校内放送の音声があります。
クリックして聞いてみよう
(QRコードをタッチすると、限定公開youtubeへ)

校長先生



エピソード2 卒業式

卒業式はかなり変わりました。これまでは5年生と6年生だけでやっていたのですが、1学年1クラスになったのもあって、1年生から全員で出席する卒業式にしました。

それで、そのなかでステージの上に、卒業生20人くらいが全員前に並ぶんです。

で、卒業生一人一人に向かって、在校生がメッセージを投げかけるんです。

卒業生の〇〇君には5年生の△△君が、卒業生の□□さんには、同じく5年生の××さんが……

「〇〇さんには、運動会の時に僕に～～ということをしてくださいました。今でも忘れられません。ありがとうございました！」という感じです。

卒業生の中には、まだ日本語がわからない子どももいますよね。

そういうときは、在校生が日本語でメッセージを投げかけた後に、その子の母語が話せる子どもが、続けて母語で即興の翻訳をするんです。

これ、すごいですよ。式の静寂な空気の体育館中に中国語とかが響き渡るんです。凜として、まっすぐな声で。それを、当の6年生だけじゃなくて、そこに居合わせる保護者もみんなそれを聞くんです。

その響き渡る中国語の声の中で、ふだん「日本語がわからない子ども」とみられがちだった子どもたちが、実は素晴らしい言葉の持ち主だったことを私たちはまざまざと知るんです。子どもを見る目が変わります。

この学校に勤めて
8年目の先生



エピソード3 教務主任

うちの小学校は外国ルーツの子どもが多いので、日本語学級にも4人の教員がいます。実はその中で、日本語学級の主任を、教務主任が兼任するようにしています。

教務主任は、学校全体の時間割について、毎週確認し、学校全体がどのような時間割で、どのような形の授業が行われているのか、全体を把握する役割です。

なぜこういうことをするかって言うんですけどね……

日本語学級は、放っておくととっても立場が弱いものになりがちなんですよ。

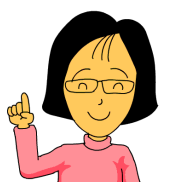
子どもたちの在籍学級のほうが立場が強くなりがちで。

全国的に日本語学級あるあるなのが、「在籍学級の先生が、急に『今日はこの時間、学級全体ですることがあるので、日本語学級へはいけません』とか、逆に『テストができていないので日本語学級でやってください』と、急にテストを子どもに持たせて日本語学級に行かせる」とかが起こりがちです。一般クラスの先生たちの中に「日本語学級の役割」がよく伝わっていないんですよ。

でもこれをやっていると日本語学級で本来やるべきことができず、常に在籍学級の下請けになってしまいます。これが続くと、日本語学級の先生たちは職員室の中のマイノリティになってしまうんですよ。そうすると、日本語学級の先生は「クラスの先生たちは外国つながりの子どものことを全然理解していない！」となって、クラスの先生は「日本語学級の先生は外国つながりの子どものことしか見ていない！」となってしまいます。これでは学校が分断してしまいます。

なので、教務主任が日本語学級の主任を兼任するんです。そうすると、日本語学級の時間割(誰が、何曜日の何時間目に来るのか)をしっかりと把握した上で、学校全体の時間割を組むことができるようになります。また、教務主任という全体を統括している先生だからこそ、いろいろなクラスの先生と話をすることができます。これは大きいです。日本語学級という場所が何をやっているのか、教務主任を通じてクラスの先生たちは知ることができるようになるんです。そして、理解を深めていくんです。そうやって「日本語学級はうちの学校の中心よね」という感覚がみんなに作られていくんです。

教務主任の先生



エピソード4 龍踊り

もともと、日本語学級の中で龍踊りをはじめたんです。中国帰国者の子どもも多かったのと、たまたま私が故郷の関西で、これまた中国の関係の人が多く住むところだったのもあって、中国の旧正月をお祝いする龍踊り用の龍をもらったんです。

これはおもしろいって思って、運動会の際に日本語学級の出し物ということで、龍踊りをしたんです。これが保護者の人たちにとってもウケたんです。保護者も中国帰国者の人が多いというのもあるんですが。

それで、数年たったときに、地域の敬老会の方が学校に来て、「あの龍踊りを敬老会でやってくれないか」という話が出たんです。それで学校の子どもたち……日本語学級の子どもたちだけじゃなくて、いろいろな子どもに呼びかけて、希望者の子どもたちで敬老会で龍踊りを披露したんです。それがいつしか定着して、地域のお祭りにも呼ばれるようになって、今は「花山小学校の龍踊りは地域の出し物の重要な1つ」という感じになってしまいましたね。

実は地域でも、以前は日本人の保護者と中国の保護者が揉めることがあったんです。「中国のやつが学校の成績を落としてる」という日本の保護者もいたんですね。実は本当は全くそんなことなく、逆に日本の子の方が成績が悪いこともたくさんあったんですが……(笑)

でも、こういう龍踊りが地域の祭りの1つになっていく中で、いつのころからか「この地域のウリは多文化だ！」という声が出始めるようになってきましたね。もちろん龍踊りがすべてをつないだわけじゃないんですが、学校の中の外国つながりの子どもの文化が、外に出て行く中でやがて地域の中で大切なものになっていったのは、よかったなあと思っています。子どもたちもとても自信になりますしね。



日本語教室の先生

